

ベルリンオリンピックにおけるナチスのプロパガンダに関する研究 The Berlin Olympic Games as the Propaganda on the Nazi.

1K07B111-8

白石愛美

指導教員 主査石井昌幸先生

副査寒川恒夫先生

はじめに

1896年、クーベルタンの提唱により近代オリンピックが誕生し、アテネで第一回大会が開催された。以来IOCは、オリンピック憲章に基づいて、平和と友好を掲げた世界的運動としてオリンピックを開催してきた。しかし、実際のオリンピックは、戦争や人種差別など、さまざまな政治的影響を被ってきた。

1936年に開催された第11回ベルリン大会は、オリンピック史上、最初に政治の直接的な影響を受けた大会として知られている。ヒトラー率いるナチス政権が、オリンピックを国家宣伝の道具としたためである。本研究では、ドイツの国家的イベントとして「成功」した「ヒトラーのオリンピック」とは、一体どのような大会であったのかを、開催当時の社会情勢と、ナチスによる大会の政治利に、IOCがどのような対策を取り、抵抗を試みたかについて検討する。

第一章 ベルリンオリンピックとナチスのプロパガンダ

ベルリン大会は、初の聖火リレーや盛大な開閉会式のセレモニー、記録映画『オリンピア』の制作と世界的上映など、その後のオリンピックに大きな影響を与えた。しかし、いっぽうでは、ヒトラー率いるナチスが、この大会を新しい政権のプロパガンダの道具とすることを企て、これに成功した大会でもあった。開会式では、ナチスの党歌が流され、巨大なスタジアムはヒトラーへの歓声であふれ、聖火リレーは、侵略経路の偵察であったとさえ言われている。

ベルリン大会は、ドイツとヒトラー政権が、世界にその力をアピールすることに利用されただけでなく、国内に向けても、ナチスの思想をアピールし、アーリア人優勢意識を国内に広めることで、反ユダヤ主義を強化する役割を果たした。

第二章 ナチス体制とドイツ組織委員会

反ユダヤ主義は、スポーツ界にも大きな影響を与えた。ドイツ大会組織委員会役員で、ドイツ体育会の中心人物であったテオ・ドール・レーヴァルトは、優れた手腕を持ちながらもユダヤ人の血が流れているとの理由から、大会前に委員の座を追われることとなった。

レーヴァルトと入れ替わるようにして例として、ドイツ組織委員会のなかで力を持ち、ベルリン大会の運営をヒトラーから任されたのが、アーリア人である、カール・ディームであった。

第三章 ドイツ組織委員会カール・ディームについて

ディームは、ベルリン大会組織委員会事務総長となり、ベ

ルリン大会の運営の中心となった。第1章でみた大会の演出やさまざまな新機軸は、ディームの手になるものが多い。このため、戦後の東西ドイツでは、ディームの評価は完全に二つに分かれることとなった。

西ドイツでは、ディームはスポーツレベルで政治をコントロールできたのは、ディームの功績であると高い評価がなされた。一方で、東ドイツでは、ナチスの政治行為をカムフラージュした人物として批判された。いずれにしても、貧しい階層のドイツ人であったディームは、ベルリン大会を契機として、社会的上昇を遂げた。ヒトラーとディームは、その意味で互いに利用しあったとも考えられる。

第四章 ベルリンオリンピックと国際関係

ドイツ政府によるユダヤ人迫害の実態に抗議する目的で、アメリカとイギリスはオリンピックのボイコットを表明した。1935年にドイツでニュルンベルク法が發布され、益々アメリカの反発が強まった。しかし、IOCの圧力によりドイツ政府の反ユダヤの運動が緩和されたため、大会直前になってアメリカとイギリスはボイコットをとりやめた。

当時のIOC会長アンリ・ド・パイエ・ラトゥールは、ドイツのユダヤ人迫害の実態を深刻に受け止めながらも、IOCで圧力をかけたという説もあるが、IOCは基本的に、内政干渉を原則として、ベルリン大会に干渉することはなかった。

おわりに

1936年ベルリン大会は、これまでにない壮大なスケールで行われ、新たな式典を設けるなど、オリンピックの「国家ページェント」化に大きな影響を与えた。アメリカの黒人選手の活躍などによって、スポーツをつうじてヒトラーの人種主義が粉碎されるような部分もあったが、華やかな大会の裏では、ナチスによるユダヤ人迫害などの恐怖政治が進行していた。

ベルリン大会では、オリンピック史上初の政治的理由によるボイコット運動が行われ、IOCもこれに対応したが、結局「ヒトラーのオリンピック」は成功をおさめたのだった。こうした問題に対して、その後IOC内部でどのような議論がなされたのかは、今後検討される必要があるであろう。